編集後記

ここ数年、量子コンピュータの処理速度が飛躍的に高まり、量子技術を活用した事業化への取り組みが加速しています。量子コンピューティングと古典計算システムを融合させて、融合領域で新たなサービス展開を具体化させる動きも活発です。量子技術がカバーする範囲は、半導体や次世代通信、創薬、材料科学、サプライチェーン管理から、街づくり、運輸・交通に至るまで多岐にわたります。量子技術の価値やそのポテンシャルを正しく認識することが今後事業を創造していく上で大事ではないかと考えておりますが、量子技術の社会実装により何が可能となるのか、この技術によって事業形態がどのように変わっていくのか、理解するには非常に難しいのが実情ではないでしょうか。

そこで今号では、量子技術を活用したエネルギー事業への応用や街づくりにおいて、最前線で事業推進されている有識者の方々から、自社の取り組みなどについて示唆に富む寄稿を頂きました。また、量子技術を活用した事業に伴う法的留意点（利用約款、知的財産、経済安全保障などの法的側面）についても弁護士事務所から寄稿頂いております。これらの発信がJOI会員の方々の事業展開の参考になればと思いますし、量子関係の情報サービスも今後展開して参る所存です。

常務理事　田丸伸介

海外投融資
Vol.32 No.3（通巻189号）
2023年5月25日発行

発　　行
一般財団法人　海外投融資情報財団

発 行 人
東 浩
〒102-0073
東京都千代田区九段北二丁目
3番6号　九段北二丁目ビル
TEL. 03-5210-3311（代）
URL. www.joi.or.jp

制作協力
（株）エディポック

＊本誌に掲載されている記事の内容や意見は、海外投融資情報財団の公式見解を示すものではありません。

●禁　無断転載

All rights reserved. No part of this magazine may be reproduced in any form or in any means without written permission from the publisher. ©Japan Institute for Overseas Investment Printed in Japan

九段だより　横文字とMetaphor

夜、静まり返ったオフィスで、メールの添付ファイルをプリンターに送信後、わずかな照明の廊下を歩いていると、ミネルヴァの梟の羽音が肩をかすめた錯覚を感じたことがありました。プリンターに出力された数枚のA4は傷だらけのモモンガのようなペーパー。他部署からのコメントがマークアップになっています。モモンガの傷を治しながら読みなおすと、すべての修正の受け入れは矛盾となり、説明の隘路に入ることに気づきます。今度は打開策に煮詰まり、廊下を歩くのですが、ミネルヴァの梟の助けはありません。

薄明りの夜道の帰路に、隘路に迷い込んだ瞬間を思い出しましたが、手続きの設計という点以外、内容の記憶はございません。BRICsレポート公表後の20年間は、VUCAといわれつつも、旧共産圏の市場主義化、通信網の発達による情報空間の拡大、サプライチェーンの多様化などを通じ、基本的にはグローバル市場が一体化する流れの中にあり、筆者の手元にあったのは些細な問題であったと思います。

現下、米中対立やウクライナ侵攻などの出口が見えないなか、欧州では戦争期間中のロシア凍結資産処分（従来の国際法秩序とは離れる手法）が検討され、中南米では資源の国有化（手続きを踏めば、こちらは国際法の範疇）が議論されるように、グローバルビジネスの乱流の渦が増加し、従来にない課題解決アプローチが必要となる気配もございます。

飛躍したシナリオを新規アプローチに織り込むためにSerendipityを求め、アイデアの着想を馬上、枕上、厠上の三上（さんじょう）に期待できるかもしれませんが、悩みながら寝ても、厠に行っても（馬の代わりに自転車に乗ってみても）、幸運の訪れは稀かと思われます。

Serendipityとの邂逅のために現実から離れる目的で模擬的に言葉を変えたMetaphorを活用する試行錯誤も選択肢です。冒頭のモモンガのMetaphorは自己組織化の性質をもち、各所に飛び廻り仕掛けを自律的に共有する動きを模したものですが、例えば、クロスボーダーの情報連携関係を考える際に、バーチャルの海で行き交う船がそれぞれの港で有意な情報の交易を行う、などのMetaphorも考えられます。また、机に向かうよりさらにひと工夫、例えば50年前の概念デザインの本の耽読やスカイラインの統一感がある長い一直線の大通りの遊歩など、非日常の時空間においてデザインの核となる閃きが訪れる確率が高い気がいたします。

国家の擬人化も含めてMetaphorのままでは、現実解に戻す際にズレが生じ、敷衍する際の論理の一般化も難しくなります。実際のペーパーワークは日常行動への落とし込みが必要です。その過程において、Affordance(注)の要素の意識的な取り込みが、利用者の馴染み感を得、アイデアを定着化できる工夫となります。

本稿においてアルファベットが多めに交ざりましたが、仮名や漢字とともに他言語文字・記号の混在表記に許容度が高い横書きの日本語については、さらなる論考が必要ですが、創造性のポテンシャルを感じる次第です。

専務理事　東 浩

注：J.J.Gibsonが提唱した概念で、環境が与える能力や機会を指し、社会制度設計では私たちに行動を起こさせしめるシグナルのようなものになります。